

トラの道

ロビン・ジェンセンによって書かれた物語

中国の十二支は、繰り返される 12 年のサイクルで構成されます。それぞれの年が一つの動物で象徴され、その動物の性質はその年に生まれた人々の性質を表していると言われています。

2022 年の太陰暦による中国の新年は、2 月 1 日火曜日に祝われ、中国の十二支の 3 番目の年、寅(とら)年です。

中国では、トラはすべての獣の王として敬愛されており、その強さ、勇気、力と勇敢さで高く評価されています。同様に、寅年に生まれた人々は、勇気があり、勇敢で自信があり、また、不屈の精神、統率力、親しみやすさ、そして人を引き付ける力に恵まれていると言われています。

扉のそばに掛けてある二つの大きな手おけを取って、若い男は水をくみに村の外れまで急ぎました。午後の暑い盛りに、さいころでばくちを打っている王の兵士たちに持って戻って来るように命じられた手おけの重みで、筋肉はこわばっていました。

途中、王への税として村人たちの収穫物を徴収する二つ目の兵士の集団を通り過ぎました。家族を養うのに必要な分量の米を乞わなければならない農民たちを見て、心が痛みました。しかし、情け容赦はありません。それらの税を取り立てるこの王は暴君で、人々は飢餓寸前にまで陥っていました。この王の支配の下、このかつては豊かだった村は、落ちぶれてしまいました。村の旗に描かれた壮麗なトラ——それはかつて人々に勇気を与えた精神の象徴——は、今や恐怖心をもたらしました。

心に火がつき、若い男は、自分の家族や近所の人々の苦しみを終わらせようと誓いました。もし虎山の頂上にたどり着くことができさえすれば！ 夏至になりました。今夜が絶好の機会です！

小さい頃からずっと、トラの伝説について祖母がひそかに話してくれました——12 年ごとの夏至の前夜、いかにして村の若者たちが偉大な白いトラを探し出すために、聖なる山に登ったかについてを。そのトラに出合い、どう猛な動物の証し——1本の歯、1本のひげ、一つの傷でさえも——の恩恵を得て戻った者は、それが誰であれ王の権限を主張し、「トラの同意により」村を支配できるとされていたのです。彼の祖母は、かつての主導者たちがその偉大な動物に祈願し、自らの支配を導くために、トラの並み外れた慈悲、勇気、強さといった美德を自分のものにしたと話してくれました。

今夜、若い男はこの伝説に自分の命を賭けていました。この神聖な動物を見たことのある人で今もなお生きている者は誰一人いませんが、村の長老たちは——その若い男の祖母も含めて——トラが人々を注意深く見守っていることを暗黙のうちに信じていました。「何としてでもトラを見つけなければ」と、彼は自分に言いました。「さもないければ、私たちはみんな絶え果ててしまう」

成功させようと決意し、彼は、護衛たちが交代する間にこっそり抜け出しました。というのも、虎山に登ることは、今や王の命令により禁じられていたからです。彼は小刀とたいまつを取りに、そして、祖母の祝福を得るために、彼が祖母と住んでいる小さなわらぶきの小屋へと急ぎました。

祖母に計画を話した後、二人は静かに少しの間立っていました。彼の決意の重大さが二人の間に漂っていました。

老女は優しく彼の顔を両手で包み、力を込めて言いました。「わが子よ、今こそ偉大な勇気が求められる時です」。輝く笑顔で彼女は彼に言いました。「覚えておきなさい。真の英雄は、心の中に生まれるということを。勇気を持ちなさい！」きつく彼を抱き締めて言いました。「トラに出合う祝福が得られますように！」そして彼女は、孫が火のついたたいまつを手にも、森の中に消えていくのを、誇りを持って見守りました。

それは難儀な旅でした。初めは、兵士たちや王の残酷さに対する怒りと憤りに勢いを得て、山を登って行きました。あたかも一撃一撃が、彼や他の村人たちが耐え忍ばされてきたひどい不正をどうにかして正せるかのように、小刀でつるを切り、下草を打ち払いながら、強引に前進して行きました。

若い男には、風や木々のうめきや、森に住む小さな動物たちが彼の怒りに満ちた猛襲から慌てて逃げる音が、聞こえませんでした。

怒りとエネルギーが尽き、ついに立ち止まると、折れてぶら下がった枝々や、森を強行してできたギザギザの道を自責の念を持って見ました。「自分の怒りのせいで、これほどたくさんの植物を傷つけてしまった」と、彼は考えました。「そしてそれによってどんな成果があったのだろうか？ こんな方法で前進してはだめだ！」

大地への謝罪として、彼はひざまずき、彼の小刀を献上するため、それを森の地面に置きました。「真の博愛の心を持って、正しく見定めさせてください」と祈りました。

そこからは、若い男は植物の間にある隙間——山を登って行く自然の道——を探して、目の前を注意深く見ました。

しばらくすると、何か柔らかいものを踏んだのを感じました。だんだん小さくなるたいまつの手かりを高く掲げ、身をかがめて目前にある地面を目を凝らして見ました。強い警戒心が走りまわった。というのも、柔らかいコケの間にあったのは、大きな動物の足跡だったからです。トラでしょうか？ その時、たいまつが消え、真っ暗になってしまいました。凍るような恐怖が彼の身を苦しめました。

森の立てる耳障りな音が耐えられないほど大きくなり、彼の考えは暴走しました。「もしトラを見つけたらどうしよう？ 小刀も、炎も、守ってくれるものがない。もしトラに圧倒されてしまったらどうしよう？」一つ一つの音もざわめきも、何かの悲運の兆しのように思えます。息をするのもやっとなりました。恐怖で見上げると、ほんのかすかな月の光が見え、祖母の声が彼を励ますのが聞こえたのです。「真の英雄は心の中に生まれる。勇気を持ちなさい」

彼女の言葉に導かれて、若い男は山を前へと、上へと進もうと決意しました。「正しく聞き取り、勇気を見いださせてください」と祈りました。何時間かが過ぎ、彼をかすめる葉の音が彼の祖母の助言を繰り返し始めました。「勇気を持ちなさい」と、それらはささやきました。「私たちはあなたと共にいますよ」。彼の呼吸は楽になりました。心も落ち着きました。密林の立てる音に障害物としてではなく、味方として——友として——耳を傾け始めました。1歩進むごとに自信を得て、トラを見つけようという彼の決意は強まりました。

彼は速度を上げました。速く登るほど、高揚感が押し寄せてきました。かなり大胆に感じ始めました。「私は本当にこれをやっているのだ」と、彼は思いました。「私は本当に英雄だ！ 村に戻ったら、彼らは私をどんなに称賛することだろう。尊敬されるだろう。王にだってなれるかもしれない！」延々と、彼のマインドには栄光の可能性が駆け巡りました。自分自身に満足し、大声で笑い始めました。来たるべき称賛の思惑にあまりにも気を取られていたので、道にあった丸太につまずき、うつ伏せに倒れてしまいました。

その時、すさまじく大きくほえる声が聞こえ、それは彼の思い上がった空想を突き刺しました——まさに彼の全身の骨の髄で振動し、彼を揺さぶって今の瞬間に引き戻す雷のようなほえる声でした。何も見えませんでした、この若い男にはトラが近くにいることが分かりました。彼はトラに保護を求め、心を込めて祈りました。「真の謙虚さの力で、あなたを正しく崇拝させてください」

彼は立ち上がって、注意深く前に進みました。呼吸を安定させ、焦点をしっかりとゴールに当てました。今は頂上の近くにて、一つの動きといえども大切でした。最後の1歩で、暗い木々を抜けて広く開けた空間に入りました。遮るもののない空の丸い天井から、月の光が降り注ぎ、すべてを照らしていました。

その光の中で辺りを見回すと、彼は心底驚きました。この空間は木々に取り囲まれていて、あらゆる枝——あらゆる葉——の、高い所から低い所まで、さまざまな大きさ、形、そして色の生き物が腰を下ろしたり、しがみついたり、またはあおむけになっているのが見えました。森のすべての生き物が、静かな集会に集まっていたのです。生き物たちは、無邪気にじっと彼を見守っていました。

そして、この空き地の真ん中に、落ち着き払って王者のように座っていたのが、偉大な白いトラでした——完璧なまでの雄大さと、巨大な力と、静けさの光景です。その毛並みは月の光の中で、雪花石こうのように輝いていました。その燃えるような目は、若者の核心まで突き刺しました。

トラのまなざしは、彼がそれまで経験したことのないものでした。すべての彼の弱さは解け去りました。すべての疑念も消え失せました。偉大な安らぎの感覚が流れ込みました。彼は勇気と信頼——自分自身に対して、そして自分の存在の核心にある者に対しての信頼——によって、大きな広がりを感じました。

彼は本能的に手を胸に当てました。目を閉じ、敬意と感謝を込めて頭(こうべ)を垂れました。長い間、若者はそのままじっとしていました。彼のマインドの目でトラを見ながら、その存在の中に浸りながら、そしてトラの資質——その慈悲、勇気、そして強さ——が彼の内側を照らすのを感じながら。

彼が見上げると、トラは立ち去っていました。辺りを見回すと、空き地に一人でいることに気づきました。彼はこの光景を夢で見たのでしょうか？ 実際に起こったとしか思えません！ 彼の心の中にあるその感覚はまだ残っていました——そして、それはまさに本物でした。喜びと新しい目的意識に満たされました。確かに、彼は今なら、村を救うことができるでしょう。

「でも、ちょっと待て！」彼は考えました。「私はひげも歯も持っていないし、体にはトラにつけられた傷痕もない」

でも、彼は神聖なトラの方から会いに来てくれるという祝福を受け取っていませんでしたか？ 偉大な沈黙の中で、彼らは心と心で話しませんでしたか？

彼は、しなければならないことを知っていました…

町の広場では、年老いた王が、群衆よりも高く据えられた黄金の玉座に座っていました。王は、彼を取り巻く兵士たちが武器を持たない村人たちに剣を向けていることで、権力を得ていました。あざ笑いながら、王は言いました。「この夏至の日に、私にあえて挑戦する者はいるか？」群衆は、不安な沈黙の中で立っていました。「まさかね！」と、王は言いました。

「待ってください！」と、群衆の後ろの方から声が聞こえました。「私はトラを見ました！ 山に登り、そこに住んでいるトラを見ました。私は、トラに与えられた権限を全うすることを主張します！」

村人たちは息をのみ、言った人を探すために、周りを見回しました。

若い男は前に進み出ました。彼の目は、新たに手にした力と権威で輝いていました。

若い男を見て、王の笑みは軽蔑の表情になりました。「ほう！」と、彼は言いました。「おまえはまだほんの子どもじゃないか！ かすり傷一つなさそうだな。印を見せろ——それとも証拠はないのか？」

内側でトラの光景を思い出しながら、若い男は大股で群衆の前まで進み出ました。王を見上げ、彼は言いました。「私たちは一つです。私はそれを見たのです」

年老いた王は、今やおじけづき、若い男の目にある何かに動揺し、跳び上がって叫びました。「この詐欺師をつまみ出せ！ こいつは山に侵入したのだ！」

兵士たちはやりを持って前進しましたが、トラはより素早く——稲光をも超える速さでした。偉大な白いトラ——虎山の伝説の生き物——は、兵士たちと若い男の間を跳び越え、王に向かってかみそりの刃のような爪でなぎ払うと、ほえ声を放ち、それは村中にとどろきました。兵士たちは恐怖におののいて、武器を捨てて村から逃げ出しました。そして、年老いた王は、今や玉座の陰で縮み上がり、こっそりと立ち去り、二度と姿を現すことはありませんでした。

村人たちは、自分たちの知る、そして愛する若い男が王位に昇るのを、驚きと喜びの中で見守りました。高貴なトラは若い王の足元に横たわり、その長いひげの1本をささげました。そして、来た時と同じように素早く、この偉大な白いトラは村外れの密林に消えて行ったのです。

村人たちの心から、歓喜の叫びが自然に湧き起こりました。若い王は、王室の穀物と薬草の貯蔵庫を開放し、その貯蔵物を老若男女、あらゆる人々に配るように指示しました。そして、澄んだ響き渡る声で宣言したのです。「トラの道が戻ってきた！」



© 2022 SYDA Foundation®.著作権所有。